HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウデヘ語動詞接辞-duの用法 : 動詞派生接辞の人称標示機能
Author(s)	白, 尚燁
Citation	北方言語研究, 3, 111-128
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52604
Type	departmental bulletin paper
File Information	08_BAEK.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究3:111-128（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2013）

ウデヘ語動詞接辞-*du*の用法
―動詞派生接辞の人称標示機能―

白　尚 燁
（北海道大学大学院博士課程）

0. はじめに[1]

本稿は、ウデヘ語の動詞接辞-*du*と人称標示の関連性について考察し、動詞派生接辞-*du*が定動詞における三人称複数の人称標識として機能していることを明らかにする。さらに他のツングース諸語との対比からウデヘ語のみこのような現象が見られるその背景と理由についても検討する。最後にチュルク諸語（キルギス語）にも類似した現象が存在することについて触れる。

・動詞接辞-*du*の現れ方

以下では、動詞形式，数・人称，否定構造における動詞接辞-*du*の現れ方を紹介する。

①動詞形式

通常ウデヘ語に見られる動詞述語構造（ボールドは必須要素）は次のとおりで、順序は固定されている。

V stem	-	voice-aspect	-	**tense/mood**	-	person/number
第一次語幹		語幹形成接辞		活用接辞		人称接辞
		第二次語幹				

図1. ウデヘ語の動詞述語構造［Girfanova（2002: 25）に基づき、筆者作成］

ところが、ウデヘ語の動詞接辞-*du*は、風間（2010a: 239）の記述通り、活用接辞（テンス・法）の前に現れたり、活用接辞の後に現れたりする極めて自由な形態構造が見られる。これは、動詞形式[2]（定動詞／形動詞）によって動詞接辞-*du*が現れる位置が異なるようである。本稿では定動詞に用いられる動詞接辞-*du*に限定して考察を進める。

・定動詞（V stem-*du*-FINIT）

1）anana　njaula-ǰiga　jeu　gusi-*du*-ǰe.
　a long time ago　child-PL　what　play-DU[3]-FUT

[1] 本稿のウデヘ語表記は、風間（2010a: 195-196）を一部改変して筆者が統一したもので、出典の表記と異なることがある［母音：a, i, u, e (=ə), o、子音：p, t, č, k, b, d, ǰ, g, m, n, ŋ, f, s, x, l, w, j］。またグロス分析や和訳も筆者の判断によるものであることを断っておく。なお本稿で主に扱うのはビキン方言で、特に言及がない場合はビキン方言を指す。

[2] 本稿では、述語的機能のみ見られる動詞形式を定動詞と呼び、述語的機能に加えて名詞的・連体的機能を合わせ持つ動詞形式を形動詞（グロスではPTCP）と呼ぶ。

[3] 本稿では動詞接辞-*du*を他の文法形式と区別するために、便宜上‘DU’とグロス表記する。

「昔、子どもたちは何して遊ぶだろうか。」

風間（2004: 470）

・形動詞[4]（V stem-PTCP-*du*）

2) nede-e-*du* gune-ø.
put-PTCP.PST-DU say-PRS
「（彼らは）置いたという。」

風間（2010a: 239）

②人称・数

動詞接辞*-du*は、三人称複数を主語とする用例（実地調査の結果などを含め、第2章で後述）が非常に多く見られるため、人称標識としての機能が考えられる。しかし、同形式が用いられる位置は、通常の人称接辞と違って、活用接辞の前である。

③否定構造

また、否定構造においても、通常の人称接辞と異なる性質が見られる。ウデヘ語の否定は、他のツングース諸語（ナーナイ語、ウルチャ語、満洲語を除く）と同様に否定専用助動詞*e-*が用いられ、否定動詞の後ろにテンス・法及び人称接辞がくるのが一般的である。

e-tense/mood-person/number	verb stem
NEG.AUX	

図2. ウデヘ語の否定構造

肯定

3-1) inei ŋene-i-ni 「犬が行く」
dog go-PTCP.PRS-3SG

否定

3-2) inei e-i-ni ŋene. 「犬が行かない。」
dog NEG-PTCP.PRS-3SG go

Nikolaeva & Tolskaya（2001: 214）

[4] 但し、これが形動詞であるかについては検討の余地がある。その理由は以下のとおりである。ウデヘ語において、定動詞／形動詞の対立は基本的に人称接辞（三人称複数の場合：定動詞：*-ø*，形動詞：*-ti*）で区別される。つまり、もしこれが形動詞なら、形動詞用の人称接辞が付くのが一般的だが、上記の用例では人称接辞が現れていない（但し、形動詞の人称接辞は省略されることもある。しかし、このように仮定すると、定動詞／形動詞の人称接辞が外見上同じ形になるため、定動詞／形動詞の区別は依然としてできない）。また、定動詞の過去形*-A′*（<*-kA*）と形動詞の過去形*-A*（<*-hA* <*-sA*）の音韻的対立は衰退しつつあるため、動詞形式から区別することも容易ではない。風間（2010a: 196）によると、少なくともビキン方言においては緊喉母音が衰退の過程にあると指摘されている。しかし、同じくビキン方言を扱ったNikolaeva & Tolskaya（2001: 216, 244）では、緊喉母音を認めて記述している。筆者は、音韻的差異でその相違を判断するのは極めて難しくなっているため、定動詞と形動詞による意味対立（証拠性）を用いてこの問題を検討する必要があると考える。これに関しては今後の課題とする。とりあえず、本稿では風間（2010a）の分析に従って形動詞と見なす。

しかし、動詞接辞-*du*は、否定構造において動詞語幹に付いたままであることから、この点でも動詞派生接辞と同様にふるまい、通常の人称接辞とは異なる。

4) nua-ti　　emne=de　　namun-tigi　　e-s'e　　xuli-*du*.
he-3PL　　once=CLT　　sea-DIR　　NEG-PST　　travel-DU
「彼らは一度も海のほうへ行ったことがない。」

ibid. 214

以上、動詞接辞-*du*は、同形式が現れる形態位置から見て、風間(2007b)が指摘したとおり（1.2.で後述）、動詞語幹に付いて第二次語幹を作る語幹形成接辞であると考えられる。しかし、筆者は同形式が三人称複数主語に限定して用いられることも注目すべきであると見ている。そのため、本稿では動詞接辞-*du*と人称標示の関連性について考察する。

1. 先行研究

まず、動詞接辞-*du*と人称標示に関する先行研究を検討し、先行研究に見られる問題点を提起する。Nikolaeva & Tolskaya（2001）と風間(2003b, 2007b)は、動詞接辞-*du*をそれぞれ以下のように解釈している。

1.1. Nikolaeva & Tolskaya（2001）：人称接辞（三人称複数）

動詞接辞-*du*は、下記のType IIとType IIIに用いられる三人称複数の人称接辞（personal inflections）[5]で、他の人称接辞とは違ってテンス・法の標識に先行すると記している。しかし、動詞接辞-*du*のみ他の人称接辞と異なる形態位置をとることに対して、明確な説明は見られない。

Distribution of personal inflections[6]

Type I	Present
Type II	Permissive（＝希求法: OPT）Subjunctive（＝定動詞未来: FUT）
Type III	Perfect（＝定動詞過去: PST）Conditional（＝仮定法: SUBJ）
Type IV	Future Converbs Present Participle Future Participle
Type V	Past Past Participle
Type VI	Imperative

[5] 上記のNikolaeva & Tolskaya（2001）によるグロス分析【動詞接辞-*du*：複数接辞（Plural suffix）】を見る限り、同形式を単なる三人称複数の人称接辞と見なしていない可能性も考えられる。しかし、下記の表1では 、明らかに三人称複数の人称接辞として認めている。そのため、本稿ではこの点において、Nikolaeva & Tolskaya（2001）の記述に不一致が見られることを指摘しておく。

[6] 記述によって定動詞体系の分類が異なるため、本稿ではShnejder (1936) , Nikolaeva & Tolskaya (2001), Girfanova (2002) , 風間 (2010a)に基づいて筆者が統一したもの【現在(PRS)：V-*ø*-人称, 過去(PST)：V-*A*-人称, 未来(FUT)：V-*jA*-人称, 仮定法(SUBJ)：V-*muse*-人称, 希求法(OPT)：V-*tA*-人称=*jA*】にしたがう。これに準じ、該当する定動詞形式を括弧の中で示した（以下同様）。

> Personal inflections usually occupy the rightmost position in the word, that is, they follow these affixes. The only exception is the 3rd person inflection *-du-* in the II and the III paradigmatic types which immediately follows the verbal stem and therefore precedes the tense/mood marker, or the marker of the non-finite form, for example, *etete-du-ǰe* 'let them work' <work-PL-SUBJ(=FUT)>. Moreover, for class I verbs ending in *-i* or *-u* whose Perfect stem is derived by the element *-ge-*, the 3rd Plural inflection *-du-* precedes this element *-ge-*. For example: *umi-du-ge* 'they have drunk' <drink-PL-PERF(=PST)>.
>
> Nikolaeva & Tolskaya（2001: 213）

次に、否定構造に関しては、下記の表1をみると、動詞接辞*-du*がもっぱら否定動詞のあとに付随する通常の人称接辞と類似した形態構造が見られる[7]。

表1. 動詞接辞*-du*と否定［Nikolaeva & Tolskaya（2001：244-245）*bu*‘give’, *jexe*‘sing’］

	Perfect (=PST)	**NEG**		**Conditional (=SUBJ)**	**NEG**		**Subjunctive (=FUT)**	**NEG**	
1SG	bu-ge-*i*	e-s'e-*i*	bu	jexe-muse-*i*	e-muse-*i*	jexe	jexe-ǰe-*mi*	ata-*mi*	jexe
2SG	bu-ge-*i*	e-s'e-*i*	bu	jexe-muse-*i*	e-muse-*i*	jexe	jexe-ǰe-*i*	ata-*i*	jexe
3SG	bu-ge	e-s'e	bu	jexe-muse	e-muse	jexe	jexe-ǰe	ata	jexe
1PL.EXC	bu-ge-*u*	e-s'e-*u*	bu	jexe-muse-*u*	e-muse-u	jexe	jexe-ǰe-*u*	ata-*u*	jexe
1PL.INCL	bu-ge-*ti*	e-s'e-*ti*	bu	jexe-muse-*ti*	e-muse-*ti*	jexe	jexe-ǰe-*fi*	ata-*fi*	jexe
2PL	bu-ge-*u*	e-s'e-*u*	bu	jexe-muse-*u*	e-muse-*u*	jexe	jexe-ǰe-*u*	ata-*u*	jexe
3PL	bu-***du*-*ge***	e-s'e-***du***	bu	jexe-***du***-muse	e-***du***-muse	jexe	jexe-***du***-ǰe	ata-***du***	jexe

しかし、実際そのような用例は提示されず、例文5)のように動詞接辞*-du*が動詞語幹に付随する用例のみ見られ、記述が一貫していない。他のウデヘ語テキストを参照しても、動詞接辞*-du*が表1のように否定動詞に付加される用例は一例も確認できないため、上記の記述には問題があると見ている。

5) bii site-ne-mi o-lo e-se eme-*du*.
I children-DES-1SG this-LOC NEG-PST come-DU
「私の息子たちがここに来なかったかい。」

風間（2004: 47）

[7] 仮定法【表1ではConditional(=SUBJ)】の否定は他の時制形式と違って、動詞接辞*-du*が法の前に位置するため、通常の人称接辞とまったく同じ形態構造であるとは言えないが、動詞接辞*-du*が否定動詞の側に位置することは人称接辞と共通している。しかし、上記にも触れているように、実際このような用例が存在するかは疑わしい。

1.2. 風間(2003b, 2007b)：語幹形成接辞（主語の複数性標示及び証拠性の機能）

①風間(2003b)では、動詞接辞-*du*が動詞の語幹拡張による主語の複数標示形式であると指摘している。

> ツングース諸語の中でもウデヘ語では、動詞で主語の複数性を表示する。相互態もさらに別にある。
>
> 風間(2003b: 255)

②風間(2007b)では、下記のように同形式に対して現れる形態位置が通常の人称接辞と異なるため、複数を示す語幹形成接辞として見なしている。

> 筆者の調査によれば、この接辞が現れる位置は、[中略]法やテンスを示す屈折形式の前である。これは人称接辞の現れる位置ではない。したがってこれを人称標示要素とみるのは正しくない。否定構造での現われをみれば、この要素が基本的に語幹形成要素であることが分かる。
>
> 風間(2007b: 113)

上記の4), 5)のような例を証拠として、動詞接辞-*du*が語幹形成要素であり、上記のNikolaeva & Tolskayaのあげる形（*e-s'e-du bu*や*a-ta-du jexe*）は間違いと考えられ、この風間氏の記述の方が支持される。

さらに、風間(2007b)は同形式が証拠性（直接経験）と関わりのある形式であると指摘している[8]。

> [省略]民話でこの接辞が用いられている場合、もっぱら登場人物のセリフの中に現れ、もしそうでない場合には、反語文であるか、もしくは何らかの「判断」のモダリティを示す形式を必要としていることがわかる。つまり、話し手が実体経験したことを言う場合にもっぱらこの接辞は現れることが分かる。したがってこの接辞はevidentialityと大きな関わりを持っているということになる。
>
> 風間（2007b: 114）

[8] しかし、筆者は風間（2007b）による動詞接辞-*du*と証拠性の関連性に関する指摘に賛同する立場ではない。その理由を以下に示す。ツングース諸語の証拠性に関する先行研究で、複数主語を示す動詞派生接辞が証拠性と関連性があるという記述は、筆者が知る限り、風間（2007b）以外には見られない。寧ろ、ツングース諸語の証拠性は動詞形式による対立【定動詞／形動詞の時制（特に、過去）】であるという記述が一般的である【ウデヘ語：Shnejder (1936), Girfanova (2002)、ツングース諸語全般：Malchukov（2000）】。風間（2007b）が提示した表や用例を見ると、直接言及はされていないが、主に定動詞（時制）に現れる動詞接辞-*du*の用例を扱っている。同氏は「この接辞は実話に多く用いられ、民話ではもっぱら登場人物のセリフの中にその出現が限られていることから」、同形式が証拠性と繋がりがあると結論付けている。しかし、これは動詞接辞-*du*が証拠性を示すというより、動詞形式が証拠性において有標である定動詞（時制）であるため、直接経験の効果が生じると解釈すべきであると考えられる。以上のことに基づき、本稿では動詞接辞-*du*と証拠性の関連性については保留して考察を進める。

動詞接辞-*du*の定義に関しては、同形式が現れる形態位置から見て風間(2007b)の記述に従い、語幹形成要素として見なすべきであると考えられる。しかし、筆者は「はじめに」のところでも述べたように、同形式が主に定動詞の三人称複数主語に現れる傾向が極めて高いため、三人称複数の標識としての機能についても検討すべきであると考える。

2. ウデヘ語テキスト及び実地調査における動詞接辞-*du*

そこで、動詞接辞-*du*と人称標示の関連性を明確にするため、ウデヘ語テキスト及び実地調査のデータに見られる動詞接辞-*du*の人称について分析を行った[9]。

2.1. テキスト

ウデヘ語テキストは、以下のように、作者によって二つのグループに分け、それぞれのテキストに見られる動詞接辞-*du*と人称標示の関連性について調査を行った。

①テキストA(風間2004, 2006, 2007a, 2008, 2009, 2010a)

テキストAでは、下記の表4で示すように動詞接辞-*du*が定動詞の三人称複数主語に現れる頻度が圧倒的に高く見られた。

表4. ウデヘ語テキストAに見られる動詞接辞-*du*と人称

	1PL.EXC	1PL.INCL	2PL	3PL	計
頻度	2(?)			261	263
割合	1%			99%	

また、動詞接辞-*du*が一人称複数主語に用いられる用例もいくつか確認できたが、その用例は文法性が疑わしい。その理由を用例と共に以下に示す。

[9] 本調査に関して、以下の五つのことを断っておく。①本調査は、注6で示したように、次の定動詞に現れる動詞接辞-*du*【現在：V-*du*-*ø*, 過去：V-*du*-ge (否定: e-se V-*du* 'NEG-PST V-DU'), 未来：V-*du*-jA (否定: ata V-*du* 'NEG.FUT V-DU'), 仮定法：V-*du*-muse, 希求法：V-*du*-tA=jA】に限定して行われた。②定動詞／形動詞の判断が難しい過去時制（注4参照）においては、動詞接辞-*du*が現れる位置【活用接辞（テンス･法）の前：定動詞、活用接辞の後：形動詞】に基づき、動詞形式を判断した。但し、動詞接辞-*du*が活用形式の前に現れても、形動詞専用の人称接辞-*ti*が用いられる場合は、形動詞と見なす。③定動詞現在時制の否定に見られる動詞接辞-*du*の用例は、本集計に入っていない。これは、現在時制の否定において、定動詞／形動詞の区別（共に*e-i-*）ができないためである。④風間 (2006: 144)の*bi-se-du-ge* (be-PST-DU-PST), 風間 (2009: 109)の*jawa-gi-ga-du* (take-REPET-PST-DU), 風間 (2009: 154)の*tausi-du-je-ti* (cure-DU-FUT-3PL)のように明らかに文法性に疑問が生じるような用例も排除した。⑤動詞接辞-*du*が人称接辞を伴う用例【風間 (2004: 63)の*xukte-du-isi-ti* (handle-DU-COND.CONV-3PL), 風間 (2004: 379)の*bagdi-du-a-ti* (live-DU-PTCP.PST-3PL), 風間 (2008: 145)の*bi-du-e-ti* (be-DU-PTCP.PST-3PL)】もいくつか確認できたが、すべて定動詞とは考えられないため、これらも本集計で扱わないことにした。

・一人称複数の実例

6) maala　degemune-ni=de　xaisi　xonto-ǰi　woo-*du*-ø-mu,　mute-e.
dried fish　drying place-3SG=CLT further　other-INS　make-DU-PRS-1PL.EXC finish-PST
「丸ごとの干し物の干し台にもさらに別に我々は作って、終えた。」

風間（2008：94）

7) uta-wa　teluŋu-*du*-ø,　buu　omo.
that-ACC　narrate-DU-PRS　we.EXC　one
「そのことを物語った、私たちは一つ。」

ibid.169

付属の音声資料で上記の例文を再確認した結果、表記に疑わしい点がある。少なくとも、例文6は*woodu, mutee*のように聞き取れ、*-mu*を二つ表記して前者を一人称複数除外の人称接辞としてみることには疑問がある。もしこれを一人称複数除外の人称接辞として認めることにしても、*woo-*「作る」と *mute-*「終える」の動詞述語に見られる主語標示に不一致が生じる点で破格である。しかも、*-mu*は形動詞に見られる一人称複数除外の人称接辞である。そうなると、この用例は、本稿が対象とする定動詞の例からはずれる。また、例文7に関しても、定動詞の一人称複数除外形の場合、人称接辞*-u*が現れるべきである（定動詞の人称接辞は、基本的に義務的であると考えられるため、人称接辞の省略の可能性は考えにくい）。以上のことに基づき、筆者はこれら用例の文法性に疑問を抱いている。

②テキストB［カンチュガ（2002，2010）］

一方、テキストBに見られる動詞接辞*-du*は他の人称では現れず、一貫して三人称複数主語に用いられることが確認できた。

表5. ウデヘ語テキストBに見られる動詞接辞*-du*と人称

	1PL.EXC	1PL.INCL	2PL	3PL
頻度				35
計				35

2.2. 実地調査

さらに、筆者が2012年にビキン方言話者（1934年生まれ）[10]から行った実地調査でも、同形式が三人称複数に限定して使われる形式であることが再確認できた。三人称複数以外の一･二人称複数主語の用例をもってElicitation調査を行った結果、相応しく

[10] 筆者が実地調査において協力を得たウデヘ語話者は、カンチュガ（2002，2010）の作者であることを断っておく。カンチュガ氏は、上記の風間氏によるテキストのウデヘ語話者に比べ、10年ほど年齢が若い。そのため、本来のウデヘ語から変容している可能性もあるが、一つのデータとしての意味を有すると考える。

ない文として判定された。その用例を以下に示す。

8-1) *buu uta-wa diga-*du*-ge-u. 「我々はそれを食べた 。」
we.EXC that-ACC eat-DU-PST-1PL.EXC

8-2) *minti uta-wa diga-*du*-ge-fi(ti). 「我々はそれを食べた 。」
we.INCL that-ACC eat-DU-PST-1PL.INCL

8-3) *suu ŋene-*du*-ǰe-u. 「あなたたちは行くだろう 。」
2PL.NOM go-DU-FUT-2PL

動詞接辞*-du*は、以下のように、三人称複数主語のみ現れる形式であると判断された。また、同形式は必須の要素ではなく、選択的に用いられる形式であることも確認できた。

8-4) nuati ŋene-(*du*)-ǰe. 「彼らは行くだろう 。」
3PL.NOM go-DU-FUT

8-5) nuati ŋene-(*du*)-muse. 「彼らは行くべきだったのに。」
3PL.NOM go-DU-SUBJ

以上、ウデヘ語テキストと実地調査から得られたデータに基づき、ウデヘ語の動詞接辞*-du*は、主に定動詞の三人称複数に用いられる形式であることが確認できた。また、一人称複数主語の用例もいくつか見つかったが、その文法性には疑問がある。したがって、筆者は同形式が定動詞の三人称複数標識として機能している可能性を指摘したい。

2.3. 動詞接辞*-du*と動詞活用の体系

次に、同形式が定動詞の三人称複数に用いられるようになった背景と理由についてさらに検討する。以下では、ウデヘ語の定動詞を時制形式とモダリティ形式に分類して考察する。下記の表6と表7はテキスト及び実地調査によるウデヘ語の定動詞体系を示したものである。

①時制形式: V-*du*-FINIT(TENSE)

下記の表6を参照すると、定動詞の三人称には人称標示が欠如していることが確認できる。三人称標示の欠如は北のホル方言と南のビキン方言に共通して見られる。そこで、ウデヘ語の動詞接辞*-du*が、下記のように、定動詞の三人称複数主語に現れることに注目したい。動詞接辞*-du*が三人称複数に用いられることにより、主語が三人称複数であることを明確に示す効果が生じる。但し、実地調査の結果からみて、同形

式は義務的な要素ではないと考えられる。

表6. ウデヘ語の定動詞時制体系[11]

	PRS (-ø-)	PST (-*A*[12]-)	FUT (-*ǰA*-)
1SG	V-ø-mi	V-A-i	V-ǰA-mi
2SG	V-ø-i	V-A-i	V-ǰA-i
3SG	*V-ø-ø → Participle	V-A-ø	V-ǰA-ø
1PL.EXC	V-ø-u	V-A-u	V-ǰA-u
1PL.INCL	V-ø-fi	V-A-fi[13]	V-ǰA-fi
2PL	V-ø-u	V-A-u	V-ǰA-u
3PL	*V-ø-ø → Participle V-*du*-ø-ø[14]	V-A-ø ⇔V-(*du*)-ge-ø[15]	V-ǰA-ø ⇔V-(*du*)-ǰe-ø

9) kaŋa　jeu　ui-le-ni　tapči　nii　eme-*du*-ø.
ondol　what　upper-LOC-3SG tightly　person　come-DU-PRS
「オンドルだの、何だの上に、人々がぎっしりと来た。」

風間（2004：444）

10) ǰube soŋgo　eme-*du*-ge　ei=tene.　「二匹の熊がやってきた、今。」
two　bear　come-DU-PST now=CLT

ibid.70

[11] 定動詞の現在時制における三人称の形式は存在しない。これは現在時制の三人称が、形動詞によって入れ替わったからであると指摘されている（Malchukov 2000: 452-454参照）。
[12] ウデヘ語は母音調和が見られる言語で、Aは接辞の母音が語幹の母音（a~o~e）によって同化される代表形を指す。また定動詞過去において、*-i, -u*で終わる動詞語幹の場合は定動詞過去の異形態*-ge*が付く。そのため、動詞語幹*-du*は定動詞過去の異形態*-ge*をとる。
[13] Nikolaeva & Tolskaya (2001), 風間（2010a)を見る限り、定動詞（過去時制、仮定法）に用いられる一人称複数包括の人称接辞は*-ti*である。しかし、筆者の実地調査ではこの形式が得られず、他の定動詞（現在／未来時制など）と同じく*-fi*が一人称複数包括の人称接辞として用いられた。それゆえ、本稿の表6･7で示す定動詞における人称接辞は既存の先行研究と多少異なるところがあることを断っておく。
[14] 動詞接辞*-du*が用いられる定動詞三人称複数の現在時制は、記述によってその定義が異なる【風間（2007b: 116）: 定動詞現在, Nikolaeva & Tolskaya（2001: 216）: Perfect（＝定動詞過去）】が、いずれの場合でも、三人称複数の標識として用いられるのは確かである。本稿では、風間(2007b)に従い、現在時制と見なす。但し、これは上記の注11で述べた説明と矛盾するところがある。これに関しては今後の課題とする。また、定動詞現在に用いられる動詞接辞*-du*が、省略できるかについては実地調査で確認できなかったため、保留しておく。
[15] 定動詞過去時制の場合、動詞接辞*-du*が省略されると、V-*du*-ge-øからV-A-øへ変化することを断っておく。これは、上記の注12で述べたように、動詞語幹の形によって後続する過去形式に変化が起こるためである。但し、*-i,-u*で終わる動詞は、動詞接辞*-du*が省略されると、V-ge-øのようになる。

11) sii site-we-i=ke waa-*du*-ǰa.
you.SG.NOM child-ACC-2SG=CLT kill-DU-FUT
「（彼らは）お前の子どもを殺すだろう。」

ibid.76

②モダリティ形式（希求法･仮定法）: V-*du*-FINIT(OPT/SUBJ)

また、動詞接辞*-du*は、時制以外のモダリティ形式[希求法（V-*tA*-人称=*ǰA*）と仮定法（V-*muse*-人称）]にも現れる。動詞接辞*-du*は、上記の時制体系と同じくここでも選択的に三人称複数の標識として用いられ、三人称複数主語を明確にする。

表7. ウデヘ語のモダリティ（希求法･仮定法）体系

	OPT	SUBJ
1SG	V-tA-*mi*=ǰe	V-muse-*i*
2SG	V-tA-*i*=ǰe	V-muse-*i*
3SG	V-tA-*ø*=ǰe	V-muse-*ø*
1PL.EXC	V-tA-*u*=ǰe	V-muse-*u*
1PL.INCL	V-tA-*fi*=ǰe	V-muse-*fi*
2PL	V-tA-*u*=ǰe	V-muse-*u*
3PL	V-(*du*)-tA-*ø*=ǰe[16]	V-(*du*)-muse-*ø*

12) waa-mi, eme-gi-(*du*)[17]-te=ǰe.
hunt-SIM.CONV come-REPET-DU-OPT=CLT
「（彼らは）獲れたら、戻ったほうがよい。」

カンチュガ（2002: 97）

13) nii-ǰige=de kuti-ǰige=de lali-mi, bude-gi-(*du*)-mese[18].
person-PL=CLT tiger-PL=CLT starve-SIM.CONV die-REPET-DU-SUBJ
「人も、トラも飢え死にしていただろう。」

カンチュガ（2010: 47）

以上の結果から、動詞接辞*-du*は、三人称単複の区別ができない定動詞体系において、選択的に用いられ、三人称複数主語を明確に示す形式であると考えられる。

[16] 但し、実地調査では表7による用例以外に、通常の人称接辞と同じ形態位置に用いられる用例（V-tA-*du*=je）も確認できた。これはNikolaeva＆Tolskaya（2001: 245）の記述と一致する。

[17] 上記の例文12), 13)はウデヘ語テキストからのデータである。これらの用例をもって動詞接辞*-du*が義務的な要素であるかElicitation調査を行った。その結果、正しい文と判定されたため、省略可能の記号を付け加えた。

[18] カンチュガ（2002, 2010）では、仮定法*-muse*が*-mese*で現れることがある。

3. ツングース諸語における人称体系

そこで、上記の考察に基づき、他のツングース諸語にも類似した現象が見られるかについて検討する。下記の図3は、ツングース諸語の分布を示したものである。

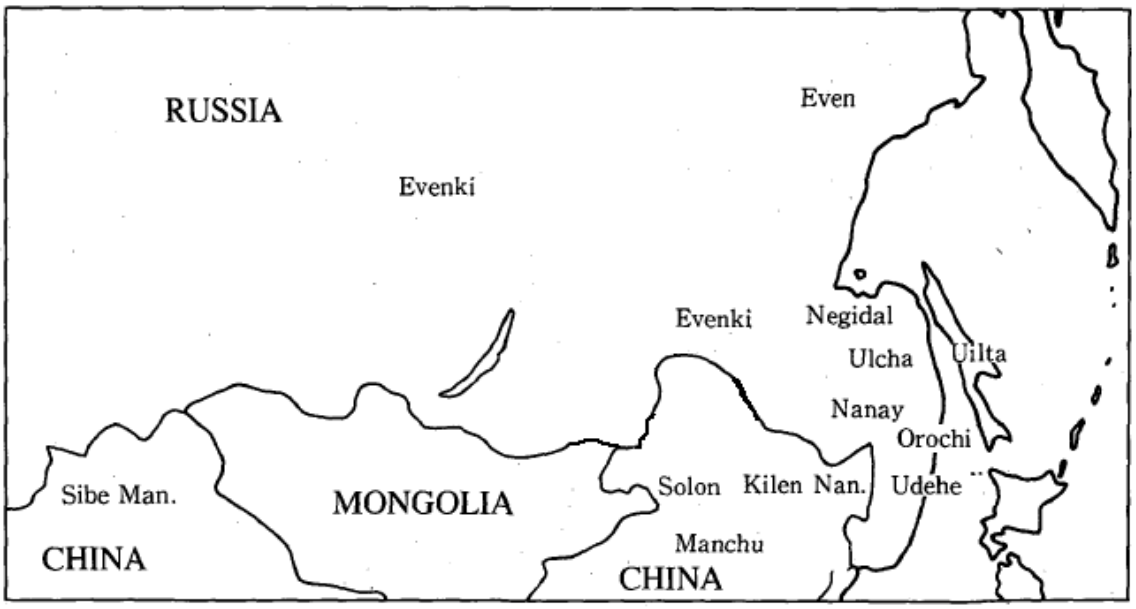

図3. ツングース諸語の分布（Tsumagari 1997: 176に一部加筆）

また、Ikegami [2001b (1974)]によるツングース諸語の分類は以下のとおりである。

・ツングース諸語の分類
第Ⅰ群：エウェン語(Ek)、エウェンキー語(E)、ソロン語(S)、ネギダル語(N)
第Ⅱ群：ウデヘ語(U)、オロチ語(Oc)
第Ⅲ群：ナーナイ語(Nn)、ウルチャ語(Ol)、ウイルタ語(Ut)
第Ⅳ群：満洲語(M)

Ikegami [2001b (1974): 395]

3.1. ツングース諸語の動詞体系と人称接辞

Ikegami [2001a (1984): 369-370]では、ツングース諸語の動詞体系における人称接辞には、二つの人称接辞セット（セット1：形動詞、セット2：定動詞, 筆者注）があり、セット1（形動詞）においてはすべての人称･数にそれぞれ異なる人称接辞を伴うと述べている。即ち、形動詞においてはすべての人称の区別が明確である。本考察ではツングース諸語における定動詞（時制）の人称体系に焦点をあてて検討する。

3.2. ツングース諸語第Ⅰ群における人称接辞

下記の表8をみると、中国領に属するソロン語を除く第Ⅰ群（エウェンキー語、エウェン語、ネギダル語）の定動詞は、三人称単数と異なる形式を用いて三人称複数の標示を明確にしていると考えられる。

表8. 第Ⅰ群における定･形動詞の人称接辞[19]［Ikegami 2001a (1984):371-372に基づいて筆者が作成］

	Ek		**E**		**N**		**S**	
	Set2 (FINIT)	Set1 (PTCP)	Set2 (FINIT)	Set1 (PTCP)	Set2 (FINIT)	Set1 (PTCP)	Set2 (FINIT)	Set1 (PTCP)
1SG	-m	-w	-m	-w	-m	-w	-mi	-ū
2SG	-nni	-s	-nri	-s	-s	-s	-ndi	-š
3SG	-n	-n	-n(i)	-n	-n	-n	-n	-ø
1PL.EXC	-w	-wun	-u	-wun	-wun	-wun	-mun	-mun
1PL.INCL	-p	-t	-p	-t	-p	-t	-tti	-ti
2PL	-s	-sun	-s	-san	-sun	-sun	-sun~-čun	-sun
3PL	-ø	-tin	-ø/-r	-tan	-ø/-l/-tin	-tin	-n	-ø

表9. 第II-III群における定･形動詞の人称接辞［Ikegami 2001a(1984):370-371に基づいて筆者が作成］

	第Ⅱ群			第Ⅲ群					
	U		**Oc**	**Nn**		**Ol**		**Ut**	
	Set2 (FINIT)	Set1 (PTCP)	Set1 (PTCP)	Set2 (FINIT)	Set1 (PTCP)	Set2 (FINIT)	Set1 (PTCP)	Set2 (FINIT)	Set1 (PTCP)
1SG	-i~-m(i)	-i~-mi	-wi~-j~-m(i)	-i~-mbi	-i~-mbi	-i~-mbi	-i~-mbi	-mi	-wi~-bi
2SG	-hi	-hi	-si	-si~-či	-si	-si~-s~-ti	-si	-si	-si
3SG	-ø	-ni	-n(i)	-ø	-ni	-ø	-ni	-ø	-ni
1PL.EXC.	-u	-u~-mu	-mu	-pu	-pu	-mu~-m	-mu	-pu	-pu
1PL.INCL	-ti~-f(i)	-fi	-pi						
2PL	-hu	-hu	-su	-su	-su	-su	-su	-su	-su
3PL	-ø	-ti	-ti	*(-l)*	-či	*(-l)*	-ti	*(-l)*	-či

[19] Ikegami [2001a (1984): 371-372]には、エウェン語やネギダル語の定動詞における三人称複数の標識が見られないが、エウェン語の未来時制には三人称複数標識*-r*を認める記述（風間2003a: 165）がある。Ikegami [2001a (1984): 377-378]でも、エウェン語未来時制におけるこの三人称複数標識*-r*【<*n+l: 3SG+PL(?)】について触れてはいる。また、ネギダル語でも名詞複数接辞*-l*（或は形動詞の三人称複数人称接辞*-tin*）が定動詞の三人称複数標識として用いられる記述（風間2002: 115）も見られる。そのため、エウェン語とネギダル語における三人称複数標識を表8に付け加えた。以上の先行研究【Ikegami 2001a(1984): 377-378, 風間(2002)】に基づくと、第Ⅰ群の一部の言語には、名詞複数接辞*-l*が定動詞における三人称複数の標示のために用いられると言えるかもしれない。

3.3. ツングース諸語第Ⅱ−Ⅲ群における人称接辞

Ikegami [2001a (1984): 369-370]では、ナーナイ語，ウルチャ語，ウイルタ語，ウデヘ語のセット2（＝定動詞）には一・二人称における人称接辞の区別しかなく、三人称には人称接辞が欠如していると記述した上で、ウデヘ語を除くナーナイ語、ウルチャ語、ウイルタ語の三人称複数には複数要素*-l*[20]が用いられると記している（表9参照）。しかし、ウデヘ語には名詞複数形式*-l*が見られないため、定動詞の三人称複数標示ができない。そこで、筆者はウデヘ語の動詞接辞*-du*が定動詞の三人称複数を示す機能を担うようになったと考える。

3.4. ツングース諸語の名詞複数接辞

以下の表10は、ツングース諸語における名詞語幹を形成する複数接辞を示したものである。

表10. 名詞語幹を形成する複数接尾辞の対応[21][池上2001 (1971): 430]

E	Ek	S	N	U	Oc	Nn	Ol	Ut	M	祖語
-l	-l		-l				-l(ɪ)~-l(i)	-l		-l
-sal ~-səl	-sal etc.	-sal ~-sul etc.	-sal etc.		-sa ~-sə	-sal ~-səl	-sal(ɪ) ~-səl(i)	-sal ~-səl	-sa etc.	*-sal または *-sa(+*-l)

上記でも述べたように、第Ⅲ群の定動詞（第Ⅰ群の一部の言語も含め）に見られる三人称複数標識は名詞複数接辞*-l* に由来するものである。ところで、上記の表10をみると、第Ⅱ群のツングース諸語（ウデヘ語、オロチ語[22]）のみ名詞複数接辞*-l*が欠如していることが確認できる。これは、第Ⅱ群のツングース諸語に起こった音変化によって、第Ⅱ群のツングース諸語では複数接辞*-l*が消えたことによると考えられる。風間(2010a：193)には、ウデヘ語の音節末のソノラント（*-n, -l,-r*）の衰退が第Ⅱ群のツングース諸語に見られる（*-lt->-kt-, -ld->-gd-, -lk->-kk-, -lg->-gg-, -lb->-gb->-bb*）と記されている。つまり、本来ウデヘ語に見られた名詞複数接辞*-l*が音変化によって消失し、定動詞の三人称複数が動詞接辞*-du*によって示されるようになったと考えられる。

3.5. ウデヘ語と第Ⅲ群における定動詞の三人称複数標示

ウデヘ語と第Ⅲ群のツングース諸語は、それぞれ別の方法で、定動詞の三人称複数を標示する。第Ⅲ群のツングース諸語は、ツングース諸語共通の名詞複数接辞*-l*(屈折

[20] ナーナイ語文法記述（風間2010b: 240）、ウルチャ語文法記述（風間2010c: 127）では三人称複数接辞（省略可能）を示す人称接辞として記述している。
[21] ナーナイ語、ウルチャ語における複数接辞*-l*は、すでに名詞複数接辞としての働きを失い、定動詞の三人称複数を標示する機能のみ担っていると考えられる（風間2010b, 2010c参照）。
[22] オロチ語は、他のツングース諸語と違い、形動詞と定動詞が三人称単複の区別が明確である形動詞によって一体化された。そのため、オロチ語は定動詞における三人称複数の標示を必要としない。

接辞)を用いて三人称複数主語を示す。一方、ウデヘ語は音変化によって名詞複数接辞*-l*を失ったため、動詞派生接辞*-du*をもって定動詞の三人称複数を標示することになったと考えられる。

・ウデヘ語：三人称の人称標識が欠如　⇒ 動詞派生接辞*-du*で三人称複数標示
Verb suffix *-du* (derivational)　→　3PL personal suffix

・第Ⅲ群：三人称の人称標識が欠如　⇒　名詞複数接辞*-l*で三人称複数標示
Noun plural suffix *-l* (inflectional)　→　3PL personal suffix

このような現象はツングース諸語、モンゴル諸語と共にアルタイ諸語を成すチュルク諸語にも見られる。

4. チュルク諸語（キルギス語）

多くのチュルク諸語において、定動詞の三人称複数標示は以下のように名詞複数接辞*-lAr*によって示される。

> Most finite predicative verb forms, including most aspect-temporal forms, may assume pronominal personal markers. The plural suffix *-lAr* is found optionally in some third-person forms.
>
> Erdal（1998:145）

しかし、キルギス語はウデヘ語と同じく、動詞派生接辞が三人称複数の標識として用いられる[23]。

> (In the finite verb forms,) The third person is indicated by *-(I)š*, formally identical with the reciprocal suffix. It has maintained its place in the verbal morpheme chain, e.g. *Kelišti*. 'They came'.
>
> Kirchner（1998: 350）

下記の表11は、キルギス語の定過去に見られる人称接辞と実際の用例を示したものである。キルギス語の相互態*-š*は、動詞語幹について第二次語幹を形成する語幹形成要素であるため、通常の人称接辞と現れる形態位置が異なるが、三人称複数主語の際、三人称複数の標識として機能する。これは、ウデヘ語の動詞接辞*-du*と共通している現象であると考えられる。但し、ウデヘ語の動詞接辞*-du*にはその形式本来の意味[24]が

[23] 風間（2003b: 254-256)でも、三人称複数の標識としては認めていないが、チュルク諸語（キルギス語を含め）に動詞の相互形式が複数主語を標示する機能があると述べている。
[24] 筆者は動詞接辞*-du*が満洲語の共同･相互形式*-ndu*を借用した形式であると推定している。その根拠は次のとおりである。①ウデヘ語にも共同形式*-gdi*（満洲語*-ndu*と対応する形式）が存在するが、風間（2010a: 235)で述べられているように、その生産性を失って化石的な要素になっている。

ほぼ見られないのに対し、キルギス語の動詞接辞-*š*は、相互を示す派生接辞としての機能も残っている。この面においては、両言語に差異が見られる。

表11. キルギス語の定過去体系（飯沼1995：122に一部加筆）

	人称接辞	je-　'eat'
1SG	-m	je-di-m
2SG	-ŋ	je-di-ŋ
2SG.POLIT	-ŋız~-ŋiz~-ŋuz~-ŋyz	je-di-ŋiz
3SG	-ø	je-di-ø
1PL	-k	je-di-k
2PL	-ŋar~-ŋer~-ŋor~-ŋør	je-di-ŋer
2PL.POLIT	-ŋızdar~-ŋizder~-ŋuzdar~-ŋyzdør	je-di-ŋizder
3PL	-ø / ***-(ı)š-~-(i)š-~-(u)š-~-(y)š-***	je-di-ø/je-***š***-ti-ø

5. まとめ

本稿は、ウデヘ語テキスト及び実地調査のデータに基づき、ウデヘ語の動詞接辞***-du***と人称標示の関連性について検討した。その結果、動詞派生接辞***-du***がウデヘ語の定動詞における三人称複数の人称標識として用いられる傾向が極めて高い形式であることが確認できた。一人称複数主語の用例もいくつか見つかったが、その文法性に疑問が生じる用例である。したがって、筆者はウデヘ語の動詞接辞***-du***が、定動詞において、三人称複数の人称標識として機能していると結論付ける[25]。但し、同形式は必須の要素ではなく、選択的に三人称複数標示のために用いられると考えられる。一方、第Ⅲ群のツングース諸語には、名詞複数接辞***-l***が選択的に定動詞の三人称複数標識として現れる。しかし、ウデヘ語にはこのような名詞複数接辞***-l***が見られない。これは、ウデヘ語にはツングース諸語に共通して見られる複数接辞***-l***がウデヘ語に起こった音変化によって消失したからであると推定される。それゆえ、ウデヘ語は動詞派生接辞

言い換えれば、同形式は事実上、存在しないことと同様である。そのため、新たに共同を示す形式を借用する可能性は考えられる。②第Ⅲ群のナーナイ語においても満洲語の共同･相互形式***-ndu***と類似した形式が見られる。Avrorin（1961: 44）によると、ナーナイ語には共同･相互の意味に近い形式***-ndu***が存在し、これはツングース祖語に対応する形式ではなく、孤立的な形式であると説明されている。また、同氏は満洲語にも同じく共同･相互を示す形式***-ndu***があると言及している。この記述に基づくと、ナーナイ語の***-ndu***は満洲語から借用された形式である可能性が考えられる。それゆえ、ナーナイ語と共に満洲語と隣接しているウデヘ語にも同形式が輸入された可能性は考えられる。しかし、これについては更なる検討が必要であるため、本稿ではその可能性を提起するにとどめる。ナーナイ語における同形式の存在は、査読者の先生のご教示によって知ったもので、ここに記して感謝を申し上げたい。

[25] この主張は、第1章で述べた風間（2003b: 255）の記述（動詞の語幹拡張による主語の複数標示）と類似した見方ではあるが、風間（2003b）では動詞接辞***-du***が現れる動詞形式を考慮せず、上記の結論を出している。筆者は、この記述と違って、定動詞における動詞接辞***-du***に焦点を置き、同形式が三人称複数主語の標識として用いられると見ている。

*-du*を用いて定動詞の三人称複数を標示するようになったと考えられる。これと類似した現象は、ツングース諸語以外に、チュルク諸語のキルギス語にも見られる。

6. 今後の課題

本稿は、動詞接辞*-du*が活用接辞（テンス・法）の前に現れる定動詞において、三人称複数の人称標識として機能していることについて論じた。しかし、本稿の「はじめに」でも言及したとおり、動詞接辞*-du*は活用接辞の後にも現れる形式である。この問題を明確にするためには、動詞形式（定動詞／形動詞）による証拠性の対立を念頭において判断すべきであると考えられる。さらに、動詞接辞*-du*がどこに由来する形式であるかについても更なる検討が必要である。これらに関しては、今後の課題とする。

略号一覧

1, 2, 3: 1st person 2nd person, 3rd person
ACC: accusative
CLT: clitic
COND.CONV: conditional converb
DAT: dative
DES: designative
DIR: directive
DU: Udihe verbal suffix '*-du*'
E: epenthesis vowel
EXC: exclusive
FINIT: finite
FUT: future
INCL: inclusive
INS: instrumental
LOC: locative
NEG: negative
NOM: nominative
OPT: optative
PFT: perfect
PL: plural
POLIT: politeness
PRS: present
PST: past
PTCP: participle
REPET: repetitive-reversive
SG: single
SIM.CONV: simultaneous converb
SUBJ: subjunctive
=: 付属語境界

【謝辞】

本稿を作成するに当たり、指導教員である津曲敏郎先生には日頃より懇切なご指導を頂いた。2012年のウデヘ語実地調査に関しても、津曲先生より貴重な研究費を分けて頂いたばかりではなく、調査の際にもいろいろご指導を頂いた。また査読者の先生からも多くのご教示や指摘を頂いた。そのすべてに必ずしも応えられていないことを恐れるが、本稿の改訂にあたって、多大の恩恵を得たことに深く感謝申し上げたい。キルギス語に関して江畑冬生氏にご教示を頂いたことにもお礼申し上げたい。当然ながら、本稿における全ての誤りは筆者に帰するものである。

参考文献

飯沼英三1995『キルギス語入門』東京：ベスト社

池上二良2001「ツングース諸語の変遷」『ツングース語研究』: 397-445. 東京：汲古書院（初出：1971『言語の系統と歴史』岩波書店所収）

風間伸次郎2002『ネギダール語テキストと文法概説』（ELPR publication series: A2-021, ツングース言語文化論集19）吹田：大阪学院大学情報学部

風間伸次郎2003a『エウェン語テキストと文法概説』（ELPR publication series: A2-030, ツングース言語文化論集23）吹田：大阪学院大学情報学部

風間伸次郎2003b「アルタイ諸言語の3グループ（チュルク、モンゴル、ツングース）、及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか―対照文法の試み」アレキサンダー・ボビン／長田俊樹共編 『日本語系統論の現在』日文研叢書31:249-340 国際日本文化研究センター

風間伸次郎2004『ウデヘ語テキスト(A)』（ツングース言語文化論集24/A）東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

風間伸次郎2006『ウデヘ語テキスト2』（ツングース言語文化論集31）東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

風間伸次郎2007a『ウデヘ語テキスト3』（ツングース言語文化論集35）札幌：北海道大学大学院文学研究科

風間伸次郎2007b「ウデヘ語の「複数」を示す要素について」『環北太平洋の言語第14号』津曲敏郎編:103-118, 札幌：北海道大学大学院文学研究科

風間伸次郎2008『ウデヘ語テキスト4』（ツングース言語文化論集42）東京：東京外国語大学

風間伸次郎2009『ウデヘ語テキスト5』（ツングース言語文化論集44）東京：東京外国語大学

風間伸次郎2010a『ウデヘ語テキスト6』（ツングース言語文化論集47）東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

風間伸次郎2010b『ナーナイの民話と伝説12』（ツングース言語文化論集48）東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

風間伸次郎2010c『ウルチャロ承文芸原文集5』（ツングース言語文化論集49）東京：東京外国語大学

カンチュガ、A./津曲敏郎（編訳）2002『ウデヘ語自伝テキスト』（ELPR publication series: A2-019, ツングース言語文化論集 17）吹田：大阪学院大学情報学部

カンチュガ、A./津曲敏郎（編訳）2010 『ウデヘ語自伝テキスト 2：青年時代』（ツングース言語文化論集 50）札幌：北海道大学大学院文学研究科

Avrorin, V.A. 1961 *Grammatika nanajskogo jazyka,* 2 vols. Leningrad: Nauka.

Erdal, M. 1998 Old Turkic. L. Johanson & É. Á. Csató eds. *The Turkic Languages*: 138-157. London/New York: Routledge.

Girfanova, A.H. 2002 *Udeghe*. München/Newcastle: LINCOM EUROPA.

Ikegami, J. 2001a The category of person in Tungus: Its representation in the indicative forms of verbs. *Tsunguusugo kenkyuu*: 369-379. Tokyo: Kyuukoshoin (First appeared in: 1984 *Proceedings of the Thirty-First International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa, Tokyo-Kyoto 1983*:332-333, The Tōhō Gakkai)

Ikegami, J. 2001b Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprache. *Tsunguusugo kenkyuu*：395-396, Tokyo:Kyuukoshoin (First appeared in:1974 Sprache,Geschichte und Kultur der Altaischen Völker, Protokollband der XII. *Tagung der Permanent international Altaische Conference 1969 in Berlin*: 271-272, Berlin Akademie Verlag).

Kirchner, M. 1998 Kirghiz. L. Johanson & É. Á. Csató eds. *The Turkic Languages*: 344-356. London/New York: Routledge.

Malchukov, A. L. 2000 Perfect, evidentiality and related categories in Tungusic languages. In L.Johanson & B. Ultas eds. *Evidentials: Turkic, Iranian and neighbouring languages*: 441-469. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Nikolaeva, I & M. Tolskaya. 2001 *A Grammar of Udihe*. Berlin/NewYork: Mouton de Gruyter.

Shnejder, E. P. 1936 *Kratkij udegejsko-russkij slovar'*. Moskva/Leningrad: Gosudarstvennoe uchebno-pedagogicheskoe izdatel'stvo.

Tsumagari, T. 1997 Linguistic diversity and national borders of Tungusic. H.Shoji & J.Janhunen eds. *Northern Minority Languages: Problems of Survival (Senri Ethnological Studies no.44*): 175-186. Suita: National Museum of Ethnology.

Udihe Verbal Suffix *-du*: Function as the Third Person Plural Marker

Sangyub BAEK
(Graduate School of Letters, Hokkaido University)

This study aims to clarify the relationship between Udihe verbal derivational suffix *-du* and person marker. In conclusion, Udihe verbal suffix *-du* is proved to optionally work as the third person plural marker in the finite verb form, which is a very unique way for the Tungusic languages since most of Tungusic either optionally or necessarily marks the third plural person with the plural suffix *-l*. This unusual phenomenon is presumed to result from the fact that Udihe lost the common Tungusic nominal plural suffix *-l* in the process of phonetic change. The similar case of marking the third plural person with verbal derivational suffix in the finite verb is also found in Kirghiz of the Turkic languages.

（ベック・サンヤップ　iyairaykere@hotmail.co.jp）